

論 文

幼児教育における「つくる」ことに関する一考察  
—佐賀県国公立幼稚園九州ブロック特別事業—

高石次郎

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(令和2年1月24日受理)

**Consideration about the Meaning of Making**  
— Special Study Meeting by National and Public Kindergartens in SAGA—

Jiro TAKAISHI

(*Department of Children's Studies*)

(Accepted January 24, 2020)

**Abstract**

I was requested the lecturer and the planning of Special Study meeting. The theme is “Bring up the abundant sensitivity in a child” & “Play while touching a familiar natural objects” It was held in August and November. Participants of a meeting in August were teachers of a national and public kindergartens in Saga-ken, and participants of a meeting in November were teachers, children and guardians of a national and public kindergartens in Saga-ken. In this paper, I look back to the contents of a meeting until implementation and a workshop, and consider about the meaning of making

Key words : Child education 幼児教育  
Special Study meeting 特別授業  
Meaning of making つくること

## 1. はじめに

佐賀県国公立幼稚園会より、令和元年の夏季と秋季に行われる特別事業（講演と実習）の協力依頼があった。この特別事業は毎年一回九州各県で開催されており、昨年は大分県、来年は沖縄県となって今年佐賀県が当番となっている。今年の研究統一テーマは「子どもの豊かな感性を育む～身近な自然に触れて遊んでわくわくドキドキ～」と決まっており、8月に幼稚園教諭を対象とした研修会（ブロックキャンペーン研修会）と11月に保護者・子どもも参加しての研究大会（九州ブロック佐賀大会）の両方で、講演と造形活動を行うことが筆者に依頼された。本稿では、推進委員長との8回に及ぶ打合せと研修会と研究大会を振り返りながら、幼稚園・保育に携わる教諭や保護者が参加することを念頭に置いた「つくる」ことについての講演内容を紹介し、幼児教育について考察することにする。更に、幼児教育での「つくる」ことの意味を再考することにもなると考えている。

## 2. 研究テーマの考え方／捉え方

特別事業の研究テーマは幼稚園教育要領を基に作られたであろうと思われ、研究大会が佐賀県北部の自然豊かな場所に位置する幼稚園で行われることから、このテーマになったようである。推進委員会では、講師が造形や幼児教育の講演を行い枯れ枝・松ぼっくり・どんぐりなどを使っておもちゃや動物を作ってお土産に持って帰ってもらうというイメージを持っておられた。つまり、誤解を恐れずに言えば、形式的に研究大会を行うために講師も必要という程度の形骸化された大会運営を考えておられたと推測している。このことは、単に推進委員会の取り組み方が甘い等と誹謗中傷するのではなく、現代社会のあらゆる場面に見られることであるため、日々の仕事に追われストレスを抱えながら生きる人々にとって、本質に迫らずに物事を消化していくことは現代に生きる知恵でもあると考えられよう。しかしながら、筆者は造形教育や美術教育の重要な役割の一つが、物事の本質に迫り、且つその本質を具現化することにあると考えている。このため、筆者が形骸化していると推測した研究大会の内容に疑問を感じたのである。このことについて以下に述べることにする。

筆者は、前所属の大学<sup>1)</sup>で生きる力を育むための

小学校図画工作科における造形遊びの理論と実践を主に研究してきた。そして、現所属の大学では幼児教育（小学校を含む）を担当している。さまざまな実践を見るにつけ、幼児教育での造形と小学校での造形遊びで求められることは、ほぼ同じであると感じている。二つに共通することは、個々の表現を尊重し行為（過程）を重要視するという‘造形教育の原点’である。次に、二つの違いは、次のように考えられるだろう。幼児教育の造形では‘造形教育の原点’を子どもと幼稚園教諭が当たり前に行っているにも拘らず、教諭が、この‘造形教育の原点’の意味を認識していないようである。また、小学校では、子どもと教諭が日々の知識に偏りがちな学習によって失われがちな‘造形教育の原点’言い換えれば創造性のような価値を造形遊びによって回帰しようとしていると考えられる。

幼稚園での‘造形教育の原点’の認識不足は、例えば芋ほり遠足に行き芋ほりの絵を描かせると皆同じような色・構図・場面の絵を描くことに教諭は疑問を感じていないことなどに見られる。つまり子ども一人ひとりがそれぞれの異なる表現を行うことが学びの一つの現れであり、そのための場づくりを教諭は自然に行っているにも拘らず、‘造形教育の原点’の認識が不足しているために、自信を持って一人ひとりが異なる表現を行うことに踏み出せないでいる。つまり‘造形教育の原点’を認識していないために、その実践の目的を達成できていないのである。

以上のような筆者の考えから、推進委員長との打ち合わせにおいてお互いの幼児教育に対する考え方／捉え方の差異の確認作業が始まった。探り合いのような話し合いの後に、推進委員長は筆者の造形教育に対する考え方／捉え方を理解してくださり、その後の大会内容の立案がスムーズ且つ有意義に進んでいくこととなった。

この推進委員長（内容によって他の委員も参加）との8回に及ぶ打合せによって、推進委員と講師の関係が密になると同時に、特別事業の骨子が固まっていき内容に深みが増していった。こうやって徐々に本テーマにある「わくわくドキドキ」は、形式的で冠的な大会テーマ名に留まらず、われわれ運営組織の企画立案においても「わくわくドキドキ」となり活気づいていったのである。更に、講演のテーマにある“「つくる」行為”は、本事業に関わるスタッフの相互の関係によって本事業を企画立案し実行す

る（＝「つくる」行為）という筆者たち大人にも立ち上がってきたと捉えられる。このことは本事業・本研究の特色として大切な根幹となったと考えている。

従って、本稿で特別事業を振り返ることは、「わくわくドキドキ」や「つくる」行為が参加者に学びを与えるのみならず、企画者側にも与えられたと言えるだろう。つまり、ここでは「教えられる側」と「教える側」のような二項関係でなく常に協働しながら学ぶ関係となったのである。

次に、筆者の考え方／捉え方について講話で話した内容を紹介することとする。

### 3. 「佐賀県国公立幼稚園会 夏季研修会」： 幼稚園教諭を対象とした研修会

#### (1) 概要

夏季研修会の開催概要は以下の通りである。

- ・日時：令和元年8月7日（水）9：30～12：00
- ・会場：佐賀大学教育学部附属幼稚園
- ・参加者：佐賀県内国公立幼稚園（8園）  
教諭36名
- ・目的：
  - ・全会員の参加により会員の資質向上を図る。
  - ・令和元年度統一テーマ「子どもの豊かな感性を育む」及びサブテーマ“身近な自然に触れて遊んでわくわくドキドキ”の研修に資する。
  - ・講演を拝聴し、身近な自然に触れて遊ぶことの大切さや、自然物を使っての遊びについての理解を深め、九州ブロック特別事業の親子活動にも活かしていく。

#### (2) 講演「つくる行為に埋め込まれた学びⅠ」

（講師／高石次郎）9：35～10：05

##### ①陶芸と筆者

筆者は佐賀大学教育学部特設美術科を卒業後、タイルや壁画などを製造販売する陶磁器産業の民間企業、有田焼産業を支援する佐賀県窯業試験場を経て、上越教育大学そして西九州大学と職歴を重ねてきた。また、個人的な陶芸作品制作と作品発表を継続して行ってきた。筆者の職業（産業／教育）と作品制作は、例えば本業と趣味（余暇）というような別々の関係でなく車の両輪のように互いに高めあう関係で

あった。つまり、それぞれの領野にある思考や技術などが相互に行き来しあうことで、新しい意味や価値を生み出す原動力となる関係である。その関係では作品や技術の可視的〈もの〉的なものでなく意味や思考などの〈こと〉的なことが行き来することになる。また、営利を目的とする民間企業でなく研究や教育を行う大学という職に筆者が属することによって、陶芸が自身の生活費を生み出す手段としてでなく、純粋に生きることや教育に役立つ陶芸を模索できたことは、陶芸を単に器などを作ることと〈もの〉的に捉えず、陶芸にある素材・技術・工程や陶芸文化が持つ意味と人間が生きる関係性を〈こと〉的に認識する一助となったと言える。

##### ②枠や専門を乗り越えること

筆者は、美術教育を学校教育だけで行われることと捉えておらず、人が生きること・人と「つくる」こと・人と美術／芸術などの関係の中で美術に絡んで人が成長・変化することにあると捉えている。そして、幼児教育・初等教育・生涯学習などの枠にとらわれずに、子どもや大人の生きる・学ぶことを一纏めにして捉える研究という立場をとってきた。つまり、幼児教育の専門家でない筆者が、上記のような立場で研究に協力することを推進委員に理解していただければ相互にとって有効な機会になると考えた。また、ともすると、大人の社会は何事にも二項対立的に判断しがちで誤解や曖昧さが許されないのに対して、大人の社会を未学習で組織や自治等の価値が未成熟な幼児の社会（価値）は、二項対立的な判断がない造形・美術の分野と相通ずるのではないだろうか。このようなことから、幼児教育専門家でなくとも造形・美術の立場から幼児の学びを考察することは意義あることと考えられる。

##### ③失敗や成功

一般的に、研修などでは実践の成功例が紹介されることが多く、参加者は自分の教育現場に持ち帰ってその実践を行うのが慣例であるのではないだろうか。筆者は自身の陶芸作品制作で起こった沢山の失敗や成功を経験したことから多くのことを学んできたために、単に実践例を再現するような本質や背景を抜きにした実践にはあまり価値を感じずに鵜呑みにしない。そのことから、今回の研究大会においても「失敗から学ぶ」を基本とする旨を推進委員長と確認しあった。そのため、大会の造形活動でもお手

本となるような過程や完成形を実践例（教材）として提示するのではなく、失敗や成功が偶発する造形行為の過程にこそ意味があるということを重視した。従って、完成しなければならないという誘惑に負けないようにすることが肝要である。この考えは、秋の大会で参加者が完成品として作品を作らなければならないことや、その作品をお土産として持ち帰るという呪縛（＝常識・美談）から解放されることにも繋がったし、呪縛からの解放は過程に意味がある認識の明確化や自覚にも役立った。

#### ④ 幼児の学びは昔も今もアクティブラーニング

現在、学校教育では、生きる力の養成に力を注いでいる。平成から令和へ変わった今、子どもたちの自主性や次の時代を生き抜く力の養成へと移行しアクティブラーニングが求められている。その背景では、人工知能（AI）の時代で人間が人間として生きていくことを探求するとともに人間社会における情報や知識などがどうあるべきかが問われている。このような時に、アクティブラーニング的な生きる力を身に付けなければ、これからの社会で生き残れないという緊迫した時代の要請があるようである。

しかし、子ども特に幼児の学びは昔も今もアクティブラーニングそのものではないだろうか。われわれ大人が効率・利益・権利・近代化・SNSなどの価値や環境に欲が絡み合う中で、ますますアクティブラーニング的な生き方から距離を置いた生活になってきており、もともとアクティブラーニング的である子どもたちに悪影響を与えていると考えられる。つまり、教育に携わっている大人自身がアクティブラーニング的ではないという現実を認識しておく必要があるだろう。このような構造を自覚することによって、大人と子どもとの関わり方の在り方も変化すると考えるのである。

さて、前述した大人が求めてしまう効率・利益・権利などは経済性が絡むことで結果を求めざるを得ないし、その影響が巡り巡って学校教育に及んでいることは否定できない。学校教育での教科・領域で、音楽・体育そして造形や美術は本来的に結果を求めることを目標にしていない。つまり、前述した呪縛から解放された造形や美術の活動は、本来アクティブラーニング的な子どもにとって、われわれ大人が思っている以上に自由にのびのびといきいきとあらゆる意味を立ち上げながら活動していく特徴を持っているものだと考えられる。特別事業の打合せや研

修会・研究会でも、ついつい「子どもが動かなかったらどうしよう？手順を詳細に示さないと子どもは活動できないのではないか？」と心配をし過ぎる場面が幾度もありました。更に、その心配が子どもに親切であり活動がスムーズに終了するからという理由によってその過干渉・過支援的なあり方は助長されるのである。

#### ⑤ 造形活動の捉え方

①～④の内容を踏まえて、本日の造形活動の捉え方について参加者に次のような確認を行った。まず、造形活動では進行役の指示通りに進むことを第一とせず正解や不正解はないので伸び伸びと活動して欲しい。そこには「教える側」と「教えられる側」の間柄はなく、状況に応じて臨機応変に対応することを大切にすることを伝えた。次に、筆者が話した内容を当たり前のこととして分かっている気にならないで欲しいと伝えた。何故ならば、分かってしまうということはそこで思考が停止するのであって、永遠に分からない方が思考は展開すると考えられるからである。換言すれば、分からない→分かる→分からない→分かる・・・の発展的な繰り返しが大事なのである。このように、生きる力・アクティブラーニングにおける学びは、常に問い続け分かれろうとする姿勢であることが肝要であって、そこに継続的な生きること／生きる力が生じると考えられるのである。また、本日の造形活動では、前述したように、新しい実践例（教材）の習得と捉えずに、この活動の根底にある〈こと〉的な「つくる」行為を体感・認識することを期待している。

#### (3) 造形活動内容 10:30～11:50

活動（ファシリテーター／高石次郎）の内容は、以下の通りである。

ア 石ころを使った創作活動

『石が顔にヘンシン』

イ 夏の自然物を使った自由活動

『何ができるかな？』

ウ グループ毎の発表

エ 講評

〈造形活動の様子〉



で草花を摘んだり、砂場で遊んだりすることに抵抗がある子どもも見受けられる。

子どもは、身近な自然に触れたり、遊んだりすることを通して豊かな感性や表現力が育まれる。幼稚園教育要領の幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の一つにも「自然との関わり・生命尊重」が示されている。自然は、子ども達を育む様々な要素があり、とても魅力的である。形や色、におい、音、肌ざわり、味などを通して、五感を刺激してくれる。また、美しさ、不思議さ、怖さなどの体験をさせてくれる。そして、自然の中で、歩いたり走ったりするだけでも、身体能力が鍛えられる。このように、子どもは、様々な経験から「何だろう?」「どうしてだろう?」という思いを持ち、たくさんのことを学んでいく。

身近な自然に直接触れることを通して多くの学びがあることを考慮しつつ、令和元年度の特別事業・ブロックキャンペーン研修会九州ブロック佐賀大会では、秋の自然物を使った創作活動や遊びに焦点を絞って行う。親子でつくったり遊んだりしながら会話や交流をすることで、創作活動や遊びの楽しさ、自然のおもしろさや魅力を感じると共に、感性や表現力を育む機会としたい。

(開催要項より抜粋)

#### 4. 「佐賀県国公立幼稚園会 九州ブロック佐賀大会」：幼稚園児及び保護者を対象とした研修会

##### (1) 概要

九州ブロック佐賀大会の開催概要は以下の通りである。

- ・日時：令和元年11月16日（土）9：30～12：20
- ・会場：三日月幼稚園（小城市）
- ・主催：全国国公立幼稚園・こども園長会、佐賀県国公立幼稚園
- ・後援：佐賀県教育委員会、小城市教育委員会
- ・参加者：佐賀県内国公立幼稚園（8園）  
教職員44名、幼稚園児49名。保護者44名（43組93名）
- ・テーマ：身近な自然に触れて遊んで、親子でわくわくドキドキ～遊びの中で育つ学び～
- ・趣旨：

近年、急激な技術革新や生活環境の変化に伴い、家庭ではスマートフォンやゲーム機器を使っでの仮想空間の体験が一段と増える傾向にある。園庭

##### (2) 講演「つくる行為に埋め込まれた学びⅡ」

(講師／高石次郎) 9：50～10：20

###### ①前置きとして

今回は対象が保護者と2回目の受講となる佐賀県内国公立幼稚園教諭であるため、夏季研修と内容の重複を避けた。また、始めに、「本日は当たり前だけ見えなくて気付かないことを話します。あらゆることを見える化（数値化）することが求められる今日ですが、見える化できないことがあります。その感情や創造などの思考にあたる〈こと〉を見える化（〈もの〉化）するのが芸術などの「つくる」行為だと思っています。」と前置きをして、次の講演内容に入っていった。

###### ②自己紹介と話の趣旨

筆者は筆者が実践する陶芸作品制作と筆者が関わる教育を別のものと捉えずに、車の両輪のように互いに高め合う関係としてきた。筆者の陶芸作品は用途の有無を問わず完成形を作品の結果として想定しその結果に向かって突き進むような制作を行ってお

らず、完成に至るまでにある陶芸が持つ素材・技術・工程と筆者のあらゆる関係から意味や形が生まれてくることを強く意識した制作を行っている。つまり、前者のように最終的な形から逆算して制作が進んで行くのではなく、後者は素材・技術・工程と筆者の間にある関係性の積み重ねに依拠しており、そこでは、粘土の表情や焼成の雰囲気など一瞬の現象を自分の味方に付け制作の発想や思考の源としていくことが重要になってくる。そのためには、素材・技術・工程を〈もの〉的に捉えずに、丁寧に謙虚に且つ尊敬し、〈こと〉的な重厚な双方の関係を築く必要がある。

この関係性は、「つくる」行為にある様々な出来事を大切にすることである。また、人びとの日々の生活や子どもの日々の遊びにある「つくる」行為では、一つひとつの行為が意味を持って、更に新しい意味を立ち上げていっている（意味生成）が、その意味生成は、自分でも意識しづらい他人からは見えるものではない。つまり、子どもが「つくる」行為をしているとしても、そこで何が起きているかは大人からは見えないことが多いのである。しかし、この見えにくい「つくる」行為にある意味生成こそが学びであり、この学びを大人が認識又は想像できるようになるのが最も重要で今日求められていることと筆者は考えている。

このような、見えないことに気付き認識することについて、③以降では、筆者の身近で起こった出来事を例に話（③～⑦）をし、次に行う造形活動では参加者が見えないことを認識する体験をしてもらうことにする。

### ③自然と人間

今回の研修テーマは「身近な自然に触れて遊んで、親子でわくわくドキドキ～遊びの中で育つ学び～」とあるが、このことについて考えてみる。今日、われわれ人間は自然を破壊し数々の絶滅種を生み出しているが、人間は自然の一部であるという自覚が薄れ自然に対して傲慢なのではないだろうか。いずれ地球も人間も取り返しがつかない状況になると多くの人が感じているが、自分が生きている間は大丈夫という利己主義が働き解決への実行が進まないことが自然破壊の要因と考えられる。曲がった見方だが、研修テーマを見ると都合が良い時だけ自然を利用しているようにも解釈できる。そう考えると、今回の造形活動では、自然に詫びながら感謝しながら、

自然物に対し対等又は敬いながら、自然から学ばせて頂くという気持ちを持つことが極めて重要ではないだろうか。

### ④自然から学ぶとは何か

絵画の世界では「花などの自然物をスケッチして学ぶ」ことが昔から良く行われる。花や樹木には人知の及ばない形や構造が発見できて学ぶことが沢山あるものである。筆者は作品制作において人間（自分）の作為的な部分を極力取り除いて出来る造形に挑戦した一時期があった。その時は、自分が自然の在り方に近づいていると感じた。そして、これこそが造形の極みと思ったし、「無」や「芸術」を感じる事が出来た。しかし、その無作為な造形に対して自分（人間）らしさを隠蔽していることに虚言を並べ立てているように考えるようになった。換言すると、ごてごてしたものを好む自分がシンプルなものを作っていた。つまり、自分の作品でありながら自身を表現していないことが許せなくなって、この造形に終止符を打った。

今振り返ってみると、この葛藤は、筆者の作家や人間としての成長の糧になったと捉えている。つまり、今回の研修テーマで自然を取り上げている意味は、このように参加者（人間）が意味生成を含めて「つくる」行為をする際に、自然の存在が様々なことに気付かせてくれる動因となるころにあると筆者は考えている。

### ⑤技を活かす会話術

ロープマジックの公開講座<sup>2)</sup>に参加した時のことである。筆者はロープを使った簡単なマジックを教わり何とか習得できた。その後、このマジックを筆者が関連している幼稚園で園児に見せようと考えて、知人の前でやってみたが、全くの不評であった。何故ならば、技は出来ているが技と絡まった会話術が出来ていないのである。このことから、その場の雰囲気作りや流れを作っていないとマジックとして鑑賞に堪えるものにならないことを学んだ。また、幼稚園の教諭は日々何気なくこのような会話術をやっている達人であると確信したのと同時に、技だけではコミュニケーションに発展しないことを学んだ。人工知能（AI）の発展の中で、人間は何をすればよいのかという議論をよく耳にする昨今であるが、この会話術のところに人間にしかできないことが見え隠れしてくるようである。

### ⑥造形教育が果たす役割

知り合いにテニスが上手くスポーツ推薦で高校に進学する中学3年女子がいる。ある時、彼女が学校の美術の授業で左手をデッサンする課題や一点透視図法を模写する課題があって、「上手く出来ないし面白くない」と筆者に愚痴を言ってきた。そこで、その課題が持つ教育的役割について次のように彼女に説明した。「それらの課題では、本物と同じように描写するためには、線の太さ・強弱・濃さなどを臨機応変に関連付けて工夫して紙の上に再現することになる。この工夫をすることにより得られる目に見えない創造力や応用力はあなたの思考力として蓄積される。そして、その思考力は、絵を描くことのみならずテニスのプレイの中でも発揮される可能性がある。だから、上手で美しい絵を描くことを目標として考えなくてよくて、テニスの上達のためと考えてみてはどうだろうか。」このように、造形教育は、色や形等を使って思考力や表現力を育て、人間を鍛え人生を豊かにするためにあるのではないだろうか。

### ⑦「つくる」こととは意味をつくること

造形教育で作るといふと作品という〈もの〉にすることと一般的に思われている。しかし、見方を変えると、作品という〈もの〉が形作られると同時に作者の心の底から、様々な意味〈こと〉が作られている。そして、作品を作る内面でつくられていく意味〈こと〉は、とても抽象的で言葉によって説明しにくい。しかし、この見えない上に説明しにくい故に、子どもの表現手段として有効な役割を果たすと考えられないだろうか。というのも、言葉はしばしば相手との誤解を生みだしてしまい、そのことで心が傷ついたりもし、思考を停止したりするからである。しかし、造形は、理解しにくいから、いつも誤解だらけで曖昧なものであり、それ故に、正解・不正解や損得などに価値を置きがちな大人から軽視されるかもしれない。従来のあらゆる価値が問い直されなければならない今日において、造形教育はますます子どものみならず大人にとっても重要な学びとなると考えている。

### (3) 造形活動内容 10:30~11:50

活動（ファシリテーター／高石次郎）の内容は、以下の通りである。

#### ア 石ころを使った創作活動

#### 『石が顔にヘンシン』

イ 秋の自然物を使った自由活動

『何ができるかな?』

ウ グループ毎の発表

エ 講評

〈造形活動の様子〉



## 5. おわりに

‘人工知能（AI）では絶対できない「なくならない人の仕事」10’<sup>3)</sup>に創造性：今まで存在しない新しい価値を生み出す仕事として画家・小説家・作曲家・写真家・料理人、次に対人能力：相手の気持ちを理解する仕事として保育士・教師・弁護士・医師・企業経営者が挙げられており、幼稚園教諭（保育士）の果たす役割は重要度を増すであろう。筆者が幼稚園教諭に接して感じていることは、本稿で述べた見えないことや当たり前のことを日常的に子どもと行っているにも拘らず、その価値を認識していないことである。このことは突発的な出来事や慣例となっている仕事などにおいて、本質や構造の認識が不足しているための的確な判断ができないことに

繋がったりするだろう。幼稚園教諭が‘子どもが可愛い、子どもが好き’は大前提であるが、そこに本稿で述べたことを認識することにより、より安定して幼児教育に携わることができると考えている。換言すれば、日々の体験をただの経験として捉えるのではなく、そこで生じた目に見えない感情や気づきを身体にしみ込ませる経験として意識することが重要だと考えている。

最後に、筆者自身に多くのことを学ぶ機会を与えていただいた佐賀県国公立幼稚園会に感謝申し上げます。また、特別事業推進委員会より提供いただいた貴重なアンケートに関する検討は次の研究に継続することにしたい。

## 注

- 1) 上越教育大学大学院
- 2) 公開講座：ビビッと！249「脳トレのためのマジック教室」、講師 チャ～リー、2019. 9. 28, 西九州大学健康支援センター多目的ルーム
- 3) AIZINE (エーアイジン) <https://aizine.ai/ai-job-0730/>